

## 学位論文内容の要旨

学位申請者	<p style="text-align: center;">佐藤 真知子 【比較社会文化学専攻 平成27年度生】</p>	要 旨
論文題目	<p>ヴァーツラフ・ニジンスキーの舞踊思想 — 《牧神の午後》(1912)、《遊戯》(1913)、《春の祭典》(1913)の振付にもとづいて—</p>	<p>本論文は、バレエ史における偉大な芸術家の一人と評されるヴァーツラフ・ニジンスキー（1889?-1950）の振付家としての活動に焦点を当て、これまで「性的葛藤を持った振付家本人の自画像である」とするニジンスキー振付作品の解釈に対して、身体技法や身振り言語といった、舞踊のフィジカルな側面から振付を行ったのではないかという視点に立ち、彼のインタビュー記事や当時の作品批評から彼の舞踊論に迫ろうとするものである。研究対象は、ニジンスキーの振付作品（全四作品）のなかから、その振付の内実がある程度推測できうる資料が残されている、第一作目の《牧神の午後》（以下、《牧神》）、第二作目の《遊戯》、第三作目の《春の祭典》（以下、《祭典》）の三作品を選択した。</p> <p>第1章では、ニジンスキーの振付家としての活動に焦点を当て、彼が何を想い、どのように舞踊表現に向き合ったのかという問いの解明を試みた。第2章では、《遊戯》に焦点を当て、振付に影響を与えたとされているエミール・ジャック＝ダルクローズの舞踊に対する志向と比較しその差異を明らかにすることによって、ニジンスキーの振付のねらいを浮き彫りにすることを試みた。第3章では、《祭典》に着目し、前章で明らかとなったダルクローズの舞踊に対する志向と比較することをとおして、その振付の特徴を検討した。第4章では、分析対象とした《祭典》評に含まれる形容詞・形容動詞のなかから、評価にかんする語を抽出し、音楽、振付、美術、作品全体という4観点から、評価傾向の時間的推移を表した。その結果、議論の中心は音楽と振付にあり、公演期間中とその後では、振付に対する肯定的な評価が高まる傾向にあるという変容が認められた。</p> <p>以上から、ニジンスキーの振付家としての試みは、身体という媒体に意識を転じるとともに、夾雑性を廃することによる繊細な身体の造形美の開拓、ならびに踊る身体の自立を目指すことにあると結論づけている。すなわちニジンスキーは、舞踊の媒体の自立、ならびに踊る身体の発展に寄与する試みを、自身の振付作品ならびに舞踊譜の考案によって進め、舞踊の新たな時代を創り出そうと先陣を切った振付家であったと総括している。</p>
審査委員	<p>(主査) 教授 猪崎 弥生</p>	
	<p>助教 福本 まあや</p>	
	<p>教授 小坂 圭太</p>	
	<p>助教 田中 琢三</p>	
	<p>教授 貫 成人 (専修大学哲学科)</p>	